The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	老年心理学の先駆者 ： 橘覚勝の足跡
Author(s)	山本, 浩市; 中川, 威; 権藤, 恭之 他
Citation	生老病死の行動科学. 2014, 17-18, p. 9-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/36362
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特別論文

老年心理学の先駆者　橘覚勝の足跡

In the footsteps of Kakusyo Tachibana: Pioneer in psychology of aging

（大阪大学人間科学研究科）中　川　　威
（大阪学院大学）山　本　浩　市
（大阪大学人間科学研究科）権　藤　恭　之
（大阪大学人間科学研究科）佐　藤　眞　一

Abstract

Kakusho Tachibana（1900-1978）was a Japanese psychologist and gerontologist born in Osaka. In this article, we reviewed the history of psychology of aging and gerontology in Japan by following Tachibana's significant contributions to the fields. He conducted research in psychology of aging from 1925, and has been known as one of the pioneers in the field. He participated in the establishment of the Japan Socio-Gerontological Society in 1958, and encouraged the active role of social sciences in gerontology. Unfortunately, after he passed away, no psychologist followed in his footsteps. In conclusion, we discussed his legacy.

Key word: history, psychology of aging, gerontology, gerontologist, Kakusho Tachibana

1．はじめに

橘覚勝（たちばな　かくしょう）（1900－1978）（図１）は，我が国の老年心理学の先駆者である。1927年に我が国初の老年心理に関する論文を発表して以降，心不全で亡くなる直前まで研究成果を多数出版し，日本の老年心理学の発展に寄与した。また，1958年の日本老年学会結成時には，橘氏は代表者８名のひとりとして参画した。このことからも，老年心理学に留まらず老年学の発展に果たした役割の大きさが窺われる。

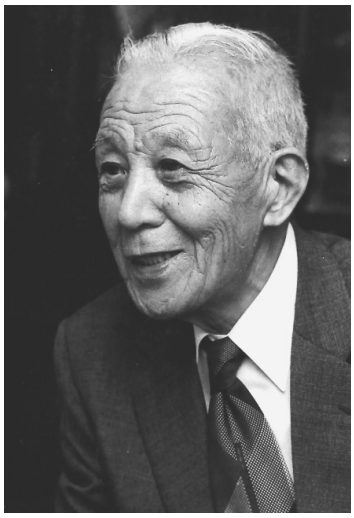

図1．橘覚勝氏の写真

これまで，我が国及び世界の老年心理学に果たした橘氏の貢献が評価されてきた（Riegel, 1977；山本, 1998, 1999）。1873年から1968年までに老年心理に関する論文を８本以上出版した第一著者71名のうち，橘氏は唯一の日本人としてその名を連ねている（Riegel, 1977）。これは橘氏が国際的にも老年心理学の先駆者であった証左であろう。それゆえ，老年心理学の初期の発展を知るには，橘氏の業績を振り返ることが有効だと考えられてきた（Yamamoto, 2000）。

このように橘氏は我が国の老年心理学に多大な貢献をしたが，橘氏の功績は現代の老年心理学者に引き継がれているとは言い難い。それは，橘氏の没後35年が経過していることだけでなく，橘氏が直接指導した弟子を持たなかったことにも因るだろう。今日橘氏の功績を再

評価することは，老年心理学の歴史の忘却を避け，老年心理学の今後の発展に繋げる機会になるのではないだろうか。

ところで，橘氏と著者らには少なからぬ縁がある。橘氏は1948年から1963年まで，現在我々が所属する大阪大学で教育と研究に携わっていた。死生学及び老年心理学を専門とする臨床死生学・老年行動学講座が創設されるのは，橘氏の退官30年後の1993年のことである。奇しくも我々は橘氏の間接的な後輩といえるだろう。さらに，2013年には本学が主催校となり第55回日本老年社会科学会大会を開催する機会を得た。本大会では，橘氏のご家族の協力を得て，橘氏の個人史を彼の遺品とともに紹介する企画展示を行い，橘氏の手書きの博士論文やその審査報告書といった貴重な資料の寄贈を受けた。

本稿では，橘氏の経歴と業績（表１）を振り返ることで，我が国の老年心理学を含む老年学の歴史を概観し，老年学の展望について考えたい。我々は橘氏の直接の指導を受けることはなかったが，「自分の歩いてきた荊棘の道を回顧しながら，この新興科学の展望を後進にゆずりたいと念願している」(橘, 1971, p2）という橘氏の願いを汲み，彼の遺産を継承したいと思う。

2．橘覚勝の足跡

2－1．戦前

橘氏は大阪にて誕生し，1923年に東京帝国大学文学部心理学科を卒業した後，同大学院にて松本亦太郎教授の指導を受けた。松本氏は我が国の心理学の先駆者のひとりであり，留学してヴントに師事し，元良勇次郎に次いで東京帝国大学の第２代教授となった。松本氏は代表的著作『智能心理學』の中で老年心理に関する研究の誕生を予見していたが（佐藤, 2008)，「多数の老人を実験的研究の対象とする事が困難なるが為め，捗々敷研究を進むる事ことが出来ないで経過し」(松本, 1925, p428）ていた。松本氏の「若き女の定めたる老人期」の研究を受け継いだ橘氏は，松本氏が日頃から「是非誰かがやらなければならぬ問題だ」と老年心理の研究に取り組むよう激励していたと回顧しつつも，「将来の発達を約束する児童，青少年の研究ならいざ知らず，死の寸前の人生段階を研究してもなんの役にも立たぬのではないかと，無知と軽率な言葉」(橘, 1971, p1）を思い浮かべたとも告白している。

1925年から橘氏は老年心理に関する研究を開始し，大正天皇銀婚式に際して表彰された全国90歳以上の者の資料を基に老性自覚に関する郵送調査を行った。さらに，1928年から橘氏は養老院浴風園における調査研究に参画し，同園の高齢者を対象にした研究に積極的に取り組んだ。その研究成果は，尼子富士郎及び福原誠三郎の支援により創刊した『浴風園調査研究紀要』，そして1927年に創設された日本心理学会が刊行した『心理學研究』に掲載されている。戦時に出版の中断が余儀なくされるまで，『心理學研究』第２巻から第14巻までに６編，『浴風園調査研究紀要』第１巻から第14巻までに17編の論文を橘氏は掲載した。橘氏が取り組んだ老年心理に関するテーマとして，高齢者の作業速度，空間弁別，色彩嫌悪，迷路学習，幼少期の記憶，連想，性格，道徳意識，宗教経験等が挙げられる。

2－2．戦中

戦争は，橘氏の人生にも影響を及ぼした。1938年から橘氏は厚生省軍事保護院顧問として傷痍軍人職業指導の研究に取り組むことになった。老年心理に関する研究を中断せざるを得なかった中でも，橘氏は全７巻から成る膨大な博士論文を提出するとともに，1941年に博士

論文を基に『老年学』を刊行している。その後戦況が悪化するにつれ，橘氏は1943年に東京を発ち大阪に戻ったが，1945年６月15日に戦災に見舞われ，自宅が全焼した。

苦難の中で執筆及び修正されたであろう博士論文を概観すると，橘氏が老年期を学際的に研究し続けてきたことが読み取れる。博士論文の構成は，第１巻「医学的基礎」，第２巻「生物学的基礎」，第３巻「社会学的基礎」，第４巻から第７巻までが「心理学的研究」から成っている。なお，各巻を詳細に見てみると，橘氏が心理学以外の隣接学問における先行研究をただ概観するだけではなかったことを窺い知ることができる。たとえば，第２巻には，橘氏が医学雑誌『民族衛生』に出版した寿命と遺伝に関する家系研究の結果も記載されている。また，第３巻には，原始社会における老人観，儒教及び神道とも関わる日本における老人観について文化人類学的な考察が記されている。さらに，第５巻では，辞世の句から高齢者の人生観を考察する解釈学的な研究も取り組まれている。1952年に博士号授与が認められた際，審査報告書にも橘氏の学際的研究の成果が高く評価されており，「恐らく老人研究に於いてこれほど各側面に亘り，包括的な綜合的研究をなし遂げたものを見出すことは恐らく出来ないことであろう。著者の學究的努力の強靭さは全く驚異に値するものである」と結論づけられている。

２－３．戦後

戦後，1948年に橘氏は大阪大学法文学部助教授に就任し，老年心理に関する研究を復活させた。また，橘氏は老年学に関する学術コミュニティの形成にも尽力した。1954年に東京にて渡辺定が中心となって結成した寿命学研究会に橘氏は理事の一員として参加した。また，1955年には橘氏は大阪大学を中心に老年科学研究会を創立した。1956年，1950年に結成していた国際老年学会に日本の老年学会として加盟を申し込むため，両研究会は日本ゼロントロジー学会として合流し，1958年に日本老年学会が結成された。結成の際，今日の日本老年学会まで引き継がれている会則の制定に橘氏は加わっている。第一に，日本老年学会結成が日本老年社会科学会と日本老年学会というそれぞれ独立した２つの学会の連合体であるとされた。第二に，日本老年学会総会は隔年に開催することとし，その中間年次は日本老年医学会及び日本老年社会科学会が別個に大会を開催することとされた。橘氏は第10回の日本老年学会総会までの内容を概観し，「社会科学，心理学関係の方面は，医学的方面の盛況にくらべて，きわめて貧弱である」(橘, 1971, p86）と述べており，老年学における社会科学，心理学の発展を期待した。

1963年に橘氏は大阪大学を定年退職したが，研究活動は留まることを知らなかった。彼は，専門家だけでなく一般社会に向けた著書を記した他，国際的なネットワークの推進にも関心を示し続けた。

1971年に大著『老年学』を，1975年に『老年学』を一般向けに改稿した『老いの探求』を刊行した。これらの著作は専門家だけでなく一般にも向けられたものであり，間接的に当時の社会に反響を与えることとなった。認知症をいち早くテーマとした『恍惚の人』の著者有吉佐和子は，『老年学』を参考資料として用いたようである。橘氏（1975）は，「専門外のあの『恍惚の人』の作者の手にもわたったようで，その折込みに拙著のことにまで言及してもらえたのは，大いに光栄であった」と述べている。なお，これらの著作は，博士論文を基に執筆されているものの，美学及び社会福祉学というそれまで取り組んでいなかった学問分野に関する成果が加わっている。『老年学』では老成円熟の境地を考察する美学的な研究が追

記され，『老いの探求』では高齢者福祉制度に関する課題と展望が平易な文章で明快に述べられた。

橘氏は1960年にサンフランシスコで開催された第５回国際老年学会には日本代表として参加する等，国際的ネットワークの推進を積極的に行った。1963年に開催された第１回国際高年者会議に参加した後，２年毎に開催される会議に全国の高齢者を連れて出席することを楽しみにしていたという（金子，1995）。さらに，1978年に開催された国際老年学会東京大会には副会長として参加する予定だったが，同年７月初旬に自宅の庭で転倒後に阪大病院に入院し，学会に参加することなく，８月30日に心不全で逝去された。そして同大会に合わせて出版された英文論文集での第５章の執筆が橘覚勝氏の絶筆となったのである（Tachibana, 1978）。

３．おわりに

1927年に老年心理に関する研究論文を発表して以降，橘氏は50年もの間に我が国の老年心理学，そして老年学の発展に生涯を捧げた。ただ残念なことに，橘氏の意志を継ぎ，老年心理に関する研究に取り組もうとする心理学者は現れなかった。高齢化率が10%に満たなかった時代に老年心理に関する研究に取り組んだ橘氏は，時代を先取りし過ぎたのかもしれない。その証拠に，橘氏の築いた数々の功績を振り返ると，彼の遺産が確かに現代の老年心理学の礎となっており，今なお取り組むべき課題を示唆していることを読み取ることができる。

第一に，老年学における学際的研究とそうした研究を推進する組織の重要性は，今日においても認識されているだろう。橘氏は自ら学際的研究に取り組むとともに，日本老年学会が医学と社会科学の２つから成ることを会則として制定し，老年学における学際的研究の実現に尽力してきた。第二に，橘氏は老年学が基礎と応用の両方を志向するものであることを示すとともに，今日でも十分に取り組まれているとは言い難い人文学的研究の可能性をも提示した。彼自身が最晩年において美学といった人文学的な基礎研究，社会福祉学といった応用研究に関心を示したことは，その後の老年学の展望を示唆するものであったろう。第三に，老年心理学を含む老年学における後進の教育の必要性である。橘氏が自戒していたが，今日においても老年学を体系的に学ぶことができる教育体制が十分に整っているとは言い難いだろう。

以上のように，橘氏の足跡を辿ることで，我が国の老年心理学を含む老年学の歴史を概観し，老年学の展望を考察することを試みた。個別の研究についての詳細は割愛したが，老年心理学を志す者は『老年学』をご一読いただき，古典的研究の結果を踏まえ今後の研究に生かしていただけたら幸いである。また，『老いの探求』を参照いただき，長年の老衰（senectitude）研究から加齢（aging）研究へと展開した橘氏ご自身の境地を読み取っていただけたらと思う。

最後に，余談であるが，ご家族からお聞きした橘氏の人柄について付記し，拙稿を閉じたい。特に『老いの探求』からも橘氏の人柄が窺われるが，橘氏は学者としてだけでなく，個人としても非常に魅力ある人物である。たとえば，橘氏は新しい物好きで，ドイツ語のタイプライターを使い，海外出張の折にパン焼き機を購入されたそうである。また，大阪大学退官後に相愛女子大学に着任されると，セリーヌのネクタイを絞めた洒落た姿で，学生たちと

西暦	元号	月 / 日	出来事	年齢(約)
1900	明治33年	2 / 17	大阪にて出生	0
1912	明治45年	3 / 25	大阪市立船場小学校卒業	12
1917	大正 6 年	3 / 25	大阪府立天王寺中学校卒業	17
1920	大正 9 年	7 / 31	第三高等学校卒業（大学予科修了）	20
1923	大正12年	3 / 31	東京帝国大学文学部心理学科卒業	23
		4 / 30	東京帝国大学文学部副手嘱託	
1927	昭和 2 年		『心理學研究』に我が国初の老年心理に関する論文掲載	27
1928	昭和 3 年	3 / 31	東京帝国大学大学院修了	28
		4 / 1	浴風園老人調査研究に参画	
		4 / 30	東京帝国大学副手解嘱　文学部嘱託	
1931	昭和6年	3 / 31	公立高等学校教授 東京府立高等学校教授	31
1938	昭和13年	4	傷痍軍人職業顧問	38
1941	昭和16年		『老年期』(弘文堂)	41
1943	昭和18年		『手』(創元社)	43
1947	昭和22年	3 / 8	大阪第二師範学校教授	47
1948	昭和23年	12 / 20	大阪大学助教授　法文学部勤務	48
1950	昭和25年	12 / 26	心理学第二講座所属	50
1952	昭和27年	4 / 21	「老年期研究」により東京大学より文学博士の学位授与	52
		7 / 1	大阪大学教授　文学部勤務	
1955	昭和30年	4	老年科学研究会を大阪大学を中心に結成	55
1956	昭和31年	12 / 8	第一回日本ゼロントロジー学会総会開催に参画（東京）	56
1958	昭和33年	11 / 16	日本老年学会結成に参画	58
1963	昭和38年	4 / 1	大阪大学教授停年退職 大阪大学名誉教授 相愛女子大学教授	63
1971	昭和46年	4 / 29	叙勲三等瑞宝章 『老年学』(誠信書房)	71
1972	昭和47年	3 / 31	相愛女子大学教授定年退職	72
1975	昭和50年		『老いの探求』(誠信書房)	75
1978	昭和53年	8 / 30	逝去	78

表1．橘覚勝略年表

連れ立ってよく喫茶店に出かけておられたそうである。最晩年には，侘び，寂び，渋いといった言葉で老いの美を探求され，自らも美を主題のひとつとして人生を送られたように思われる。死期が迫った折，橘氏は，鏡をご家族に求め，髪を梳かし，浴衣を整えて，静かに亡くなられたそうである。我々は，橘氏の著作からだけでなく，その人生からも，学ぶことができるだろう。

引用文献

金子仁郎（1995）．老年医学を作った人びと　橘　覚勝先生　Geriatric Medicine, 33, 1023-1024.

松本亦太郎（1925）．智能心理學, 改造社版.
佐藤眞一（2008）．高齢者と加齢をめぐる心理学的考察の歴史と展望　権藤恭之（編）高齢者心理学　朝倉書店　pp. 1-22.
Riegel, .（1977）．History of psychological gerontology. In J. E. Birren and K. W. Schaie (Eds), Handbook of the psychology of aging. New York: Litton Education Publishing.
橘覚勝（1941）．老年期, 弘文堂.
橘覚勝（1971）．老年学, 誠信書房.
橘覚勝（1975）．老いの探求, 誠信書房.
Tachibana, L.（1978）．Development of psychological study of the aged. In Nasu, S. (Ed), *Ageing in Japan,* International Association of Gerontology, Tokyo, pp.59-69.
山本浩市（1998）．わが国の加齢心理学の草創期について　日本心理学会第62回大会発表論文集, 3.
山本浩市（1999）．わが国の加齢心理学とWWⅡ　日本心理学会第63回大会発表論文集, 12.
Yamamoto, K.（2000）．Japan, Kakusho Tachibana, 1900-1978. In J. E. Birren, J.E, and J. J. Schroots (Eds) A History of Geropsychology in Autobiography, American Psychological Association, p.337.